
君へ

堂本実和子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君へ

【Nコード】

N5295K

【作者名】

堂本実和子

【あらすじ】

彼を苦しめているのは私。けれど思い返せば、出会った頃はとも輝いていた。でも今は、普通な日々だと思っていたものは、「普通」じゃなかった。

思い描く二人になりたいと願う彼と、普通になりたいと願う私の生き方。

二人の行く先に、未来を見つけられるだろうか…。

普通になりたい私と、優しい君

いつもとは違う。抱き寄せて何も言わず力強かった。『心配なんだよ』と、包んでくれた。

私は何故か、その瞬間は涙が出ず、一呼吸後に涙流れた。

私は何も言葉を言わなかったけれど、彼は多分、私が悲しんでいると、気付いてくれたのだと思う。

本当の気持ちは、悲しかったのではなく、苦しかったから。でもそれを解いてくれたから、嬉しくて涙が出たのだ。

あれから日々は過ぎ行く。お互いの、と言うより私の気持ちは二転三転している。

彼を裏切っているのと同じくらい、の事を毎日のようにしている。彼を苦しめているのだ。そしてそれを我慢させている。

いつそのこと、私を捨ててくれればいいと思うのに。そんな事くらいで私は死なない。

それより自分が彼を苦しめてる方が、最低だと思うのだ。だったらそれを直せばいいのだが、直し方が今は分からない。何年も我慢してもらおうのには、限界が来てしまう。将来には不安しかないだろう。

このままなら私は、多分、彼に甘えたまま、また傷付ける。自分を

抑えられないからだ。私の都合のいいように、彼を利用しているとしか思えない。

私は彼に当たれるけれど、彼は当たれる人がいない。それでは彼の心が死んでしまう。

そうなる前に、何とかしたい。

お別れした方がいいのかもしれない。

私はまた彼を傷付ける。我慢はしないほうがいい。体に悪いから。

これは、1ヶ月前の出来事で、私が落ちている時に、いつもはそういう事をしない彼が、この時には何故か慰めてくれた。そのことを今、ふと思い返していた。

二年前に彼と出会った。

最初の印象は、どうだったか。私は思い出せない。でも、とても自然だったような気がする。

一度、二人で食事をして、まだ付き合っていないのに、二度目にはお台場に行っていた。

この出来事は、他の人から見れば大した事ではないが、二人にとつては最大の、今までにないほどのドキドキ感と、恥ずかしさでいっぱいになった。

その時の事を、今でも鮮明過ぎる程に覚えていて、でもとても、口に出すなんて出来ない。心で思うだけで恥ずかしくなるほど。

一緒に横を歩くのは、考えてみれば初めてだった。だから、カップルでもない二人が並んで歩くのは、なんて「もどかしいんだ」と思った。

そう思いながら、カップルばかりの中を私達は歩いた。私は白いダウンを着て、彼は黒のダウンを着ていた。

デックスからフジテレビに向かう事になり、横断歩道の信号待ちをしている。

私はずっと考えていた。カップルじゃないのに、手を繋ぐのはおかしいかと。でも、とても手を繋ぎたかったのだ。だから今しかない、何故だか少し焦っていた。

信号が青に変わった。今しかない！

そう、心の中で叫んでいたのに、言葉は喉にひっかかって、なかなか言い出せなかった。

二人の思い出と、私のダメなところ

声にならない思いが、溢れだしそうになった。もうすぐフジテレビに着いてしまうから、だから今が、今が勇気を振り絞る時なんだ。そして、やっと言えたんだ。

『あの、寒いから、手繋いでくれませんか？』

『うっ、うん』

向こうはちょっとびっくりしてた様子だった。

これが、私達が大切にしている「おもいで」だ。

話を少し戻して、なぜ今、彼を苦しめているのか。それは私だと言った。私はアルバイトをしていた。しかしあるとき、行けなくなってしまった。

いわゆる「うつ」にかかってしまったのだ。

でも、これは彼に出会う前からそうで、それでも薬を飲みながら、バイトをしていた。

けれど、付き合ってから1年ほどで、完全に仕事に行けなくなった。

朝、仕事に行くために支度をしなければいけないのに、眠くて眠くて出来ない。体が動かない。行きたいけど行きたくない。休む為の電話さえも出来なくなっていた。

普通の人から言わせれば、「怠けてる」「我が儘」「ずる休み」になるだろう。

確かに自分でも、ダメ人間だと思った。

そして、それを彼に相談した。私は少し現実逃避していたのかもしれない。

でも彼は、私を励ましつづけ、話に耳を傾けてくれた。

私が働けない、ということと一緒に暮らすことになった。

そして彼の収入が多い訳ではなかった。だから、私の心が落ち着いたら、アルバイトをしなよ、という約束をした。

彼との毎日の生活は、とても新鮮で楽しいものだった。3ヶ月経った頃に、アルバイトを見つけた。なんとか頑張って、楽しさも見いだせていた。

それからまた半年経った頃、また嫌な予感がした。

仕事に行けなくなってしまうた。せつかく頑張ってきたのに。普通に会社に行きたいのに、行けないのだ。

1ヶ月間休みをもらえたが、結局続かずに辞めた。

彼は仕事しろとは言わなかった。ただ、規則正しい生活をしなさいと言った。

私は、心が軽くなった気がした。行きたいのに行けない自分が苦し

かったから。

そして、仕事を辞めたのをきっかけに、薬をやめようと、彼と話し合いをして決めた。

薬には副作用で眠気があったり、家事が出来ないことがたびたびあったからだ。

彼は、将来の為に、ずっと薬を飲み続けていても、今のまま変わらないんじゃない？という考えだった。

薬の作用

病院の先生とも相談して、少しずつ、少しずつ、減らすことにした。

しかし以前、3〜4日薬を飲まなかったことがあるか、禁断症状が出てしまい、とても辛かったのを思い出した。その時は急にやめたせいなのだが、またその症状が出るんじゃないかと不安になった。

1ヶ月、また1ヶ月と減らしていき、最後になり、とうとう薬を止めた。

やはり副作用で、1週間は情緒不安定におちいり、家事が出来ない日があった。でも苦しみはだんだん和らいでいった。

止めて1ヶ月、2ヶ月、過ぎた頃、私の中で異変が起きた。

彼は夜勤があった。そんななか、私は夜が不安定で眠れず、さらに、仕事もしていない自分、家事も出来ない自分、何もせずただ寝てばかりいる自分に、生きていく意味がわからなくなっていた。

毎日毎晩泣いて、私がここに居る意味がわからないと思っていた。それでも我慢していた。でも限界が来てしまい、頭に浮かんだのは、「薬」だった。

どのくらい飲めば、入院出来るだろう…と思った。

死にたい訳ではなかった。でも衝動的に、大量に飲んでしまった。

目が覚めたのは、次の日の夕方だった。

正確には、異変に気づいた彼がお昼頃に起こし、水を飲ましたりしてくれたそうだ。

だがその記憶は、私には全くない。会話もしたようだが、覚えていない。

正気に戻った私は、胃が気持ち悪く、体調は最悪で、しかも彼に迷惑をかけたという罪悪感でいっぱいになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5295k/>

君へ

2010年10月10日02時48分発行